

研究成果報告書

2023年 8月 31日

1. 所属・職・氏名 等

文学部英文学科講師 加太康孝

2. 研究課題（テーマ）名

20世紀前半ブリテン諸島（アイルランドおよびイギリス）から見る世界文学

3. 研究期間

2022年4月1日～2023年3月31日

4. 利用した研究費の種類及び金額

若手教員研究促進交付金 500,000円

5. 研究の概要

2022年度では第2項のような主題の下、世界文学を巡る近年の議論を的確に把握することを目標のひとつとした。21世紀に入り、「世界文学とは何か」という大きな問いの下で近年さまざまな研究が出版されており、その動向を整理した形で理解することを研究の出発点とした。2003年のデイビッド・ダムロッシュによる *What Is World Literature?* の出版時を起点とし、ここ20年程度の研究成果を渉猟し、整理に努めた。この調査から得られた成果を現在まとめているところであり、来年度中に論文として出版したいと考えている。

その上で、20世紀前半のブリテン諸島での動きを考察する作業も開始した。当該の時代、地域で文学作品がどのように書かれ、出版され、読まれたのか、そしてそれらがどのように文化の壁を越えていったのかということを中心に検討課題とした。この中で通時的な現象の考察も行い、「正典」が定まっていく様子、すなわち読むべき価値がある作品と評価される過程を見た。特に2022年度においては、いわゆるモダニズム文学と呼ばれる前衛的、実験的な運動、現象において出版されたり受容されたりした作品を中心に扱った。具体的に、ひとつには紫式部の『源氏物語』がアーサー・ウェイリーの翻訳によってブリテン諸島内に紹介され、このことが当地のモダニズム文学に与えた影響を考察し、またこの現象が日本に「逆輸入」され日本国内で同作や当時の文化が再評価されていくさまを跡付けつつ、具体的な英訳文の読解を行っているところである。もうひとつ本年度に着目した動きとして、20世紀前半のブリテン諸島におけるロシア文化愛好現象がある。これはバレエなど幅広い分野において見られたが、文学の領域でも同様であり、本年度はヴァージニア・ウルフおよびキャサリン・マンスフィールドがチェーホフをどのように評価し、また自身の創作に意識的、無意識的に取り入れたのかを検討した。これらについても来年度中に論文などの形で成果を発表したい。

6. 研究成果等

KABUTO, Yasutaka, 'Collective Ageing Represented in Virginia Woolf's *The Waves*', 第5回韓日国際ヴァージニア・ウルフ学会 (The 5th Korea-Japan International Virginia WoolfConference) (2022年8月19日、オンライン)

7. 研究の実績 (論文・発表 等)

加太康孝、「ダロウェイ夫人のパーティー短編作品群における中年登場人物の若さ」、日本ヴァージニア・ウルフ協会7月例会 (2023年7月16日、一橋大学)

この他、

『源氏物語』のアーサー・ウェイリー訳について原文と比較しつつ当時のイギリス文学との相互関係を考察した論文を執筆中 (2023年度から2024年度初頭にかけて投稿の予定)

また、

「世界文学」のあり方についての研究動向を整理し、考察する論文を執筆中 (2024年度中に投稿の予定)